

「新型コロナウイルスとの闘い、 在外の学校現場から」

コートジボワール アビジャン補習授業校

目次

- ① 学校の規模や子どもたちの実態
- ② 現地の新型コロナウイルス事情
- ③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければいけなくなった経緯
- ④ 実際の取り組み
- ⑤ 苦労した（している）こと
- ⑥ 喜びを感じた（感じている）こと
- ⑦ 今後への課題

① 学校の規模や子どもたちの実態

- 学校規模は令和元年度の13人から令和2年度の5人と激減。これはコートジボワールのような国に就学中の子供がいる家族がくるのが少ないこと（いても単身赴任で来るなど）や、3月末前後よりコロナ禍のせいで陸海空が閉鎖されたままのため一時退避の家族がまだ戻ってこられないでいることなどによる。
- コートジボワールに滞在した子供たちは、それぞれの学校（アメリカンスクールやフランス系の学校など）で遠隔授業を受けながらも、補習校では5月から課題を中心に遠隔授業を再開した。

② 現地の新型コロナウイルス事情

- ・コートジボワールは、他のアフリカ諸国のようにヨーロッパからの伝染が元で、他地域よりも一足遅れてコロナウイルスが広がって行った。
- ・早めに陸海空の封鎖を行ったため、件数は比較的少ない（6月10日時点で3,995件、対し人口は2,507万人）が、これはテストの量が少ないと見解もある。
- ・もっともアフリカ大陸では、自国でテストができるのが数カ国しかなく、コートジボワールはそのうちの一つ。

③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければいけなくなった経緯

- 大多数のサハラ以南アフリカ国では、医療システムが大変脆弱。大きな手術はパリやベルギー、ロンドンなどの旧宗主国であるのが常例。コートジボワールに至っては、仏語圏西アフリカの経済基盤であるにも関わらず平均寿命が57歳という、周辺諸国と比べても低くなっている。
- そのため、3月下旬—4月初旬の時点でヨーロッパ各国やアメリカにおいて感染者数が急増し、各 government がロックダウンを行う中、アフリカ諸国は自国の脆弱性を意識して比較的早めに水際対策などの手を打ってきた。各国公館は次々に家族や重要スタッフ以外を国に帰したりなどもしていた。
- 補習校においては、まず皆の安全と健康を考慮し、3月14日予定の卒業式典を遅延の後キャンセルした。その後、補習校の子供や家族の半数が、一晩で荷造りし国外脱出というような状況となつた。避難先は日本帰国であつたり、アメリカなどになつたりしたため、課題を中心とした遠隔授業が必須となつた。

④ 実際の取り組み

- 4月の時点では皆それぞれの避難先で落ち着いたり、残った人は「ニューノーマル」に対応したりと、実質閉校していたが、5月に入ってから、遠隔授業を始め、6月からは距離を取りながらの授業再開となっている。
- また、運営の面では、旧教務・運営から新教務・運営への引き継ぎのビデオ会議をしたり、書類の整理をしたりなど、授業の再開と共に並行して進めてきた。

⑤ 苦労した（している）こと

- 運営費用の確保。これは今に始まったことではないが、コロナ禍のせいで生徒数が激減し、授業料が急減、一方で家賃は上昇と、まさに補習校の存続が危うくなってきた。
- また、生徒が様々な時間帯にいるためオンライン授業は無理なので、課題の管理中心になること。

⑥ 喜びを感じた（感じている）こと

- ・親と子が一丸となって、補習校授業の継続に賛成、サポートしたこと。
- ・また、新しい非日常の中で課題を通してでもコロナ前の日常とつながっているという子供側の喜びが伝わってくること。

⑦ 今後への課題

- 生徒数が少ないので、6月からソーシャルディスタンシングをしながら授業を再開しているが、教える側がすべてボランティアでも運営費用の懸念が引き続き残る。